

## 「メディアにむしばまれる子どもたち」

田澤雄作 著 (教文館)

### 子どもたちの異変…小児科の診察室から

著者は小児科の医師である。ここ半世紀近く子どもたちを見つめてきた。

「お腹が痛い、頭が重い」と病院に来る子どもたちの多くは、目の下に「クマ」があった。「ハハア寝不足だな。TVで夜ふかしせず早く寝なさい」これだいたい良くなった。これが30年前までの話。

しかし事態はどんどん悪くなった。いじめ、不登校、傷害など社会的問題が續々浮上してきた。時を同じくして、幼稚園、保育園の先生が、子どもたちがおかしいと言いだした。子どもたちを診ていく中で、テレビだけでなく、ゲーム、携帯などの電子メディアが、日々の生活に深く喰い入っていることに気づかされた。

### 子どもの「絵」に表れた違い

本書は、子どもたちの悲鳴に真剣に耳を傾けてきた著者が「異変の実態と原因、更には対策」について、豊富な臨床例をもとに語ったものだ。以下に、その骨子を紹介したい。まず、外からは窺い知ることができない子どもたちの脳の現在の様子を著者は多数の「絵」によって検証してゆく。メディアによって大脳前頭葉の発達を阻害された子とそうでない子の違いは描かれた絵に歴然と表れる。後者の作品には身近な人、立ち木、風景が的確に表現されているのに対し、前者では稚拙な丸とか直線を引くだけで細部が描写できない。では、何故、いかにしてこの差異は引き起こされるのか。母親が授乳している時、ケイタイの画面を見ていて赤ちゃんの目を見つめない。赤ちゃんは母のまなざしをいつも強く求めている。まなざしこそが、赤ちゃんをはぐくむ大切な一歩だ。しかし、これが十分に与えられない。それど

ころか育児アプリなどという恐ろしい代物まである。そもそも、光るもの、動く

もの、音の出るものが気になって仕方ないのが人間だ。判断も拒否もできない幼児のうちからメディア漬けにするのは非常に危険だ。

### 慢性疲労の子どもたち…救う方策は

次に、子どもたちをへとへとにしている物に目を向けてみよう。まず、過熱気味の早期教育、進学競争がある。第二に、勝利至上主義のスポーツや部活がある。この二つで慢性疲労に陥っている子どもたちにメディアが襲いかかる。睡眠時間は削られる一方だ。そうなると、子どもから笑顔が消える。他者との会話が成り立たなくなり、無気力、無関心になる。詳細は是非本文を読んでいただきたい。

嘗て使い捨てライターを子どもがいじり火事が頻発したことがある。メーカーがストッパーを工夫して解決した。しかし電子機器に有効な歯止めはない。大人が本気になって、この害をくい止めるしかあるまい。幸い、著者によれば、水際に脳の廃用状態を免れる方策はあるという。実践例も報告されている。

ミヒヤエル・エンデの「モモ」に時間泥棒が出てくる。現実、このファンタジーを何層倍も悪化させて進んでいる。本書が誇張でないことは一歩外に出ればわかる。先日、孫の薬を貰いに薬局に行った。待合室のテレビはつけっ放し。スマホを見つめる母親達の側で、何人もの子どもが光と音の出る玩具に目を奪われていた。

